

第48回 ー古代の鉄ー その5 奥出雲・タタラ伝承地の探訪

古代史の旅の仲間と奥出雲を訪れる計画がまとまった。幹事の綿密な計画に従い、早朝勝沼線で岡山へ、岡山駅前でレンタカーを借り、岡山ICから高速に入り岡山道・中国道を経て、東城ICで降り、県境を越え広島県に入り国道314号線を北上する。この辺りは比婆道後帝釈国定公園の中心部であり、匂い立つ新緑の中国山地を真北に上ると、島根県境へと通過する地点に奥出雲ループがある。この通称おろちループの眺望が楽しめる道の駅で小休止、しばし、絶景を眺めて時を過ごす、近くにJR木次線の有名な坂根スイッチ・バックもある。さらに北上すると第一の目的地亀清駅である。

亀清名物「駅長そば屋」はJR西日本の委託を受けて、駅長として切符の販売や駅舎の簡単な管理をする一方、改札脇の業務室を使い、手打ちそばの店を営んでいる。この二足のわらじは現駅長の父親の代から始まり、彼が松江市内の日本料理で修業をしたのち、Uターンして15年ほど前に父親から仕事を引き継いだ。そもそも出雲のそば文化は江戸初期に信州松本藩から松江藩に転封になった松平家がそば職人を連れてきたことと、奥出雲でタタラ製鉄原料の木炭を作るため木を切り出した跡地にそばを栽培したことが重なり、根づいたという歴史がある。駅のそば屋は大人気であり、JRの乗降客よりも、我々のようにマイカーでそばを食べこくる客のほうが圧倒的に多く、今や二足のわらじではそば屋の方が優勢ということである。我々も昼食に「ざるそば」を注文する、手打ちそば評判になるだけあって中々の美味であった。近くには湯野神社が有り、松本清張の直筆を刻んだ石碑がある。亀清は彼のミステリー「砂の器」の舞台となった土地である。

粘土製の炉に木炭と砂鉄を挿入して鉄を作り出す「たたら製鉄」の技術は古墳時代後期から始まったと伝えられるが、出雲風土記(733)には奥出雲地方が製鉄の先進地であると記されている。島根県奥出雲の旧6市町村(安来市・広瀬町・大東町・仁多町・横田町・吉田村)は市町村合併により、安来市・雲南市・奥出雲町の2市1町に変わっているが、そのうち安来市には「和鋼博物館」が日本の伝統的製鉄法の「たたら」に関する総合的博物館として開館している。雲南市・奥出雲町は江戸時代には全国鉄生産の8～9割を占めていた中国山地の中でも、さらにその中心であった。そこには山林地主でありまた鉄師であった、御三家と称される田部・櫻井(可部屋)・絲原家の土蔵群、高殿をはじめとする製鉄設備、栄華を誇る屋敷などが残されている。

我々は1年前に「和鋼博物館」を訪問・見学し、「たたら」に関する基本的な知識は修得済みであったので、今回は御三家巡りをすることにした。宿を亀清温泉・玉峰山荘と定めていたので、まず最も遠い雲南市の田部家のたたら集団が拠点とした「菅谷たたら山内」を目指し、ついで可部屋、最後に宿に近い絲原家の順序で回ることにした。スタート地点の奥出雲町の周辺には奥出雲名物と云われる棚田が多く見られる。たたら製鉄では必要な砂鉄を採るために、山の斜面を切り崩し、土砂を水路に流して重い砂鉄を選び分ける「鉄穴流し」がおこなわれた。少なくとも300年以上にわたって、山の斜面を切り崩し、花崗岩などに含まれる砂鉄を採取した。選鉱は流水の衝撃で砂鉄と土砂を分離する一種の水力あるいは比重選鉱法で、土砂は流れ去り砂鉄は池に沈殿する、階段状のいくつかの池を経るごとに砂鉄の品位は上がるのである。その「鉄穴流し」の跡地を現在は棚田として利用している。名高い棚田の景観を眺めながら、いくつかの山を越え雲南市の南部へと向かう。

雲南市吉田町の中心部には、奥出雲ナンバーワンの鉄師田部家の土蔵群が立ち並んでいる。そこから更に大きな山並み一つを切り切ると、眼下に古民家の集落が見える。ここはたたら製鉄に関連する施設と、そこで製鉄に従事する人々が生活していた住居で構成される集落(山内=さんない)が全国で唯一現存している旧跡で、重要有形民俗文化財に指定されている。「菅谷たたら山内」でまず目を引くのは製鉄炉の覆屋の高殿とランドマークの桂の巨木である。高殿の外観は「写真2」の通りであるが、現存の高殿は嘉永3年(1850)の火災後再建され、大正10年(1921)まで操業していたという。



●写真1 桜井家屋敷・看板

高殿からだらだらと坂を下り、三軒長屋に見学を申し込もうと声をかけると、現れたのは少し前に放映されたNHKのTV番組に出演していた人物である。故郷にUターンして、今や菅谷高殿・山内生活伝承館施設長として、たたら炉のある高殿を中心とした集落について、来訪者に解説する語り部を務めているらしい。三軒長屋から続く一本道の両側には古民家の集落があり、はす向かいに「村下坂」という標識があった。その上の一軒屋には「村下」という、たたら炉の中に風を送り、3日3晩にわたって溶かし続ける作業を取り仕切るリーダーが住んでいた。炎の色を読み、風の量、砂鉄の入れ方を調整して、よい鉄を造る熟練の業を持った主任技術者である。坂の下から眺めると、高殿は威風堂々としている。高殿の内部にはいり、詳細な説明を受けたがここでは「高殿平面図」を示すだけにとどめておく。有名な天秤フィゴは明治の終わりのころ、水車を動力とする水車フィゴに代り、高殿には土管で風が送られるようになったため、図にはフィゴは表示されていない。

カーナビの助けを借り、山道を奥出雲町に戻り、可部屋集成館・桜井家を目指す。集成館には桜井家始祖の戦国武将・塙（ばん）團右衛門以来の歴史を伝える古文書をはじめ桜井家代々が蒐集した美術工芸品・民俗資料が展示されているが、それはパスし、重要文化財である主屋と「岩浪」と名付けられた流れ落ちる滝で有名な日本庭園の見学を申し込んだ。何と受け付けも案内も桜井家の当主がやってくれるのには、こちらがびっくりした。ただし、話がゆっくりで盛りだくさんなのは往生したが、その中で注目したのは、たたら守護神金屋子神と、勧請され庭の外縁の山腹に祀られた社についての説明であった。また、客殿の外の溪流を挟んだ対岸のもみじの林は、京都の高尾から移し植えられたという当主の一番のお気に入り、新緑から紅葉まで移り変わる四季の美しさについて熱意ある語りがあった。この地にもたたら角炉伝承館が設けられているが、内容はダブるので割愛し、最後の目的地に向かうことにした。

岡山から出発して、一日中奥出雲を走り回ったので、初夏とはいえさすがに陽は西に傾いた。絲原家に着くころには、記念館などは時間が迫っていたので、藩主の領内見回りの際本陣として使われていたという客殿棟と奥出雲の山を借景とした回遊式庭園を見せて貰う。たたら経営の鉄師御三家は広大な山林を所有



●写真3 高殿内部



●写真4 桜井家 滝のある庭



●写真5 絲原家庭園



●写真2 菅谷山内高殿 田部家の施設

していた。三昼夜連続一回の操業に要する木炭の量は約12トンで、これを生産するための森林面積は約1ヘクタールとされる。江戸時代は年間約60回の操業が普通であったから、更にたたら炭には樹齢30年以上の木材が使われるから、たたら一ヶ所操業継続のために、1800ヘクタールの森林面積を確保する必要があったことによる。一日の周遊で、そうした御三家の富の名残を十分に見物させてもらったと云うことが出来る。

(岡野 実)

-
- 文献 1 菅谷たたら山内保存修理事業 (雲南市・雲南市教育委員会)
2 可部屋集成館及び鉄師頭取の館・絲原家 見学者用パンフレット